誰も知らない

妄想少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰も知らない

【Ｎコード】
Ｎ２８６７Ｅ

【作者名】
妄想少年

【あらすじ】
あらすじ何て何もありません三十文字も使う必要もありません。
毎度の事ながら掌編

紫色が見えると結城直哉は言った。
学校の帰り道の事である。
夕焼けをバックにしながらも、直哉の黒縁メガネのレンズは空を捉えていて、なんとも不思議な感覚だった。
黒い縦襟の学生服は直哉にはお世辞にも似合ってはいなくて、だから彼がそんな風に紫色が見えると短絡的な単語に僕は耳を疑っていた。
「あ、本当だ」
空を見上げると、丁度空と夕焼けが重なる境界にパレットで混ぜ合わせたような紫の空が横一線に走っている。
「あの空の下に住む人間は、空は紫色だと考えるのかな？」
直哉は独り言のように呟く。
疑問符だというのに僕に聴いている感じはしないからだ。
だから僕は答えなかった。
直哉は僕に聴いたのでは無くて、此処に居ない誰かに聴いたのだろうと僕は今でも思っている。
「空は紫なのだろうか？　それとも青なのだろうか？」
次は僕の顔を見ながら訊いて来たので、僕は少し悩んでから口を開いた。
「片方だけという理由は無いんじゃないかな？　両方とも同じ見解だと思うよ」
「そっか……。智はそう思うか」
「うん」
夕焼けが綺麗に移る時間。
僕らはそうやって帰路に着いた。
ただ、今さらながらに思う事は紫色と短絡的に言った彼の言葉の意味を深く理解しておくべきだったのかも知れない。

彼は何を言いたかったのか。
彼は何故、紫色だと言ったのか？
その意味のありそうで無さそうな単語の意味を、深く刻みつけておかねばならなかった。
もし、この時に気付いていれば、この会話が最後になる事は無かっただろう。

次の日、彼は自殺した。

『誰も語らない』

黒と白の段幕が公民館の塀に掛かっていて、それとなくすれ違う人達は足早にその場所から離れていく。
空は午後から雨が降ると天気予報士はブラウン管の向こうで残念そうに笑いながら言っていた。
時刻は二時を回った所で、西から来る厚い雲に覆われて街頭を付けないと、明るさを感じない。
公民館の中では親族や沢山の人間が椅子に座り、学生は入り切らなくて外で中の風景を眺めている。
長い長いお経がスピーカーから流れ始めていて、僕は人から離れて公民館の塀の脇で壁にもたれながら空を眺めていた。
太陽は相変わらず空を覆い隠していて灰色ばかりが目の先に見えている。
「線香……あげないの？」
ふと見ると首にマフラーを巻いた女子生徒が僕を心配そうに見ている。

学校の白と黒の制服に紺色のカーディガンを着ている。
「最後にあげるよ」
「そう」
彼女はそう言って手持ち無沙汰に、僕の隣にある塀に体を預けた。
「……意外に悲しんで無いんだ」
「うん」
「友達だったんでしょ？　仲良かったじゃん」
「仲がいいとはまた違うと思うよ。仲が良かったんじゃなくて、気が合ったんだよ」
空を見上げたままそういう。
「それが仲がいいっていうんじゃないの？」
「さあ……どうだろうね」
仲が良かった訳では無い。
どちらかというと淡々としていたように思う。
友達というのは仲がいい奴らの事を指すんだと思う。
「どうなんだろうね？」
考えてみた所で意味を成さなかった。
二人してぼーっとしながらお経をＢＧＭになんとも無しに其処に居る。
名前は知らないけれど、彼女の方は僕に用があるらしい。
先程から横目で僕を見ている。
「何か用？」
「いや。あんた私の事知ってるのかなぁって。会話成立してるからさ」
彼女が不安そうに訊いてくる。
「いや、知らない。でも会話は成立しているんだからそれ以上は必要無いだろう」
「……言うと思った」
必要な単語は必要な時に訊いている。
彼女の名前が必要ならば、その時にまた聞くだろう。

今はそんな気分じゃない。
いっぱしに落ち込んでいるんだろう。僕という人間も。
「結城　香菜。結城直哉の妹」
ふと、彼女はそう言った。
「あなた智でしょ？　直哉がよく話してたから。死んだ魚の目をしてるって。淀んでて、濁ってて、いつも面白く無さそうにしてて、どうしてだか俺と反対意見ばかり言うって……」
僕の顔を見ないで空を見上げたまま、独り言のように彼女は言う。
「そうか」
線香をあげ終わったのか外でくっちゃべってた生徒は、僕ら二人の姿を遠巻きに見ながらひそひそと何か話始めている。
「……屑ばっかだね」
「屑じゃないよ。性格が歪んでるんだよ」
彼女はフフッと声に出して笑う。
「あなたも？」
「僕の場合は僕自身が歪んでるんだよ」
「直哉と反対な事言うね」
「反対？」
「そう。直哉も僕自身が透明なんだよって言ってた」
透明……透明か。
「なら……今日死んだ直哉は不純物という事だろうな」
彼女が不思議な瞳で僕を見ている。
眉に皺を寄せて、どういう意味と訊いている。
「直哉は透明だって言ったんだろ？　ならば透明である彼は肉体っていう不純物を棄てなきゃならなかった。だから死んだ」
彼女は目を伏せて考えている。
いつの間にかお経が止んで生徒達が帰る準備をしている。
今日はこのまま解散らしい。
遠巻きから好奇な瞳でこちらを見ているが、目を意図的に合わすと彼女達はすぐ目を伏せた。

「私にはそれで自殺する気持ちが分かんないや」
「分からなくていいと思うよ。分からなくても正解だと思うし」
立ち上がり、まだ不思議そうに考えている彼女と別れ、公民館の中へと入る。
公民館の中には人っ子一人居なくて、直哉の親ですら居ない。
外で担任とでも話しているのだろうか？
薄暗く半端に明るい蛍光灯の光は辺りを照らすというよりも、浮き上がらせるといった方が正解かも知れない。
線香をあげるための小さな黒縁の箱の中から線香の煙が上がっていた。
誰も居ない場所に自分一人というのは思っていたよりも何も無い感覚だけがそこにしか無かった。
棺桶に近づき、窓を覗いてみると昔テレビで見た蝋人形を思い出す。
あれも、こんな風に人間のような顔をしていた。
死者なんてものは死んだら人間では無いのだから、あながち表現に間違いは無いだろう。
ずっと見ていたら瞼が開かないかなと期待していたが、案の定というべきか当たり前というべきか分からないが、一度も瞼の奥にある眼球すら動く事なく彼は死んだままだった。
僕は溜め息を吐き出し、呟く。
「期待ハズレもいいとこだ……」
その声は室内に響くことなく、喉の奥へと消えた。
グイッと息を飲んだ。
直哉が少しだけ動いた気がしたのだ。
動くという事は、まだ生きているという事だ。
もう一度、目を瞑り目を開くと直哉が目を開けてこちらを見ている。
声を上げそうになった。
それを両手で口を押さえ込み、すんでのところで止める。

直哉が口を開いた。
金魚のように、口をパクパクさせて何かを伝えるように口を開く。
それが呪いのように今でも耳にこびりついて離れない。
彼はそうこう言ったのだ。

『――何も知りはしない癖に』

―完―

（後書き）

書きたかったから書いた。
ただそれだけ。
意味や哲学とかは無い。
読者とか作者とか関係無い。
所詮は携帯小説。
その枠すら出ない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2867e/

誰も知らない

2010年10月8日15時44分発行